

# 新・瘠我慢の説

経済学者  
渡辺利夫

## 第十一回 福澤、深き無念の朝鮮問題

政權転覆を図らんとする革命家が第三国に潜んでいることは、政權を握る者にとつては恐怖にちがいない。刺客を送り込んで革命家の暗殺を企てるといったことは、歴史においては枚挙に遑がないのではないか。

甲申事変に敗れ、仁川から長崎を経て東京三田の福澤邸に逃亡してきた金玉均もまた、朝鮮政府により帰国を命じられ、それに肯んじない金には刺客が差し向けられた。恐れる福澤は金を札幌や小笠原などに住ませたりしたのだが、十年後、開化派再興のチャンス到来の甘言で金を上海にお

びき寄せた人物・洪鍾宇の手により銃殺された。遺体は李鴻章の指示により朝鮮に運ばれ、「凌遲の刑」という記すのも憚られるような残酷刑に処せられた。父は金が甲申事変に敗れて朝鮮をあとにした時点で獄舎につながれ、遺体が朝鮮に到着すると同時に銃殺刑に処せられた。母と妹は甲申事変失敗の直後に毒をあおって自殺。弟も金の在日中に囚われて獄死したという。

金玉均が射殺されたとの報が伝わるや、日本の反清世論は高まりをみせた。福澤も明治二十七年四月の『時事新報』に「金玉均暗殺に付き清韓政府

の処置」を書き、日本人の対清・対韓感情は一挙に先鋭化し、これが敵意に変じていくのではないかという不吉な予想をあらわにした。有力新聞の十五社がそれぞれ金玉均の死を悼む社説を掲載、さらに十五社の連署により追悼金募集が行われた。東本願寺浅草別院での法要には一千数百人が集い、遺体と見立てた遺髪と衣服が青山墓地に埋葬された。

反清の国論を後盾として、日清戦争への開戦準備に怠りなかった人物が外務卿の陸奥宗光であった。福澤もこの頃から議論の焦点を、朝鮮それぞれより朝鮮を属領とする清国へと移し、日本政府はこれまでの不透明な政策を打ち捨て、清国に対抗する戦略をはっきりとした形で打ち出すべきだという筆法を強めた。

ところが、日清戦争は「東学党の乱」という思わぬ事件を契機に一気に展開することになった。明治二十七年四月、全羅道郡主の苛斂誅求に耐えかねて起こった秘密結社・東学党による農民反乱であ

る。道都の全州が乱徒によって制圧されるや、朝鮮政府にはなす術はなく、再三にわたり清国に出兵を要請、清国は「属領保護」を大義として出兵、清国と朝鮮との君臣関係（清韓宗属関係）を認めなくてはならじと日本もまた出兵、日清戦争勃発となった。

回り道になるが、清韓宗属関係についてちょっとだけ言及しておこう。李朝時代の朝鮮は清国を「宗主国」とし、みずからをその「服属国」とする君臣関係の下にあった。朝鮮半島は、ユーラシア大陸から日本の脇腹に突き付けられた一本の鈍のような形状をしている。この朝鮮が自立国家として存在しなければ、日本は安寧を保つことができない。それゆえ第三国の干渉を排して、朝鮮を自立させるための努力を日本はつづけなければならない。陸奥は清韓宗属関係を切断し、もって朝鮮を自主独立の国となすことが日本の「自衛の道」だと考え、同じく山縣有朋も意見書「外交政略論」をもって、「朝鮮多事ナル時ハ則チ東洋ニ一大変動ヲ生ズルノ機ナ

ルコト」とし、よつて朝鮮は日本の「利益線」だと論じた。

一言でいえば、日清戦争とは東アジアにおける帝国主義的な覇権争奪の戦いであつた。陸奥も山縣も、そして福澤も、いずれもその発想は帝国主義的なものであつた。列強がアフリカはもとより、中近東のすべてを植民地とし、南アジア、東南アジアを経て、アヘン戦争以降は中国の沿海地域を次々と租界地としていった時代のことである。最後に残されたのが日本であり、日本の後方に隠れるように存在していた「隠者の王国」(Hermit Kingdom)が朝鮮であつた。「両力東漸」の圧力に抗し富国強兵により主権国家として独立した日本が、自国の防衛を図るには、朝鮮の自立を促し、そのためには朝鮮を服属させている清国と戦うことが不可避であつた。

日本が戦いに勝利し、下関の春帆楼で日清講和条約が結ばれるのだが、その第一条こそ「清国ハ朝鮮ノ完全無欠ナル独立自主ノ国タルコトヲ確認

ス。因テ右独立自主ヲ損害スベキ朝鮮国ヨリ清国ニ対スル貢獻典禮等ハ将来全ク之ヲ廃止スベシ」である。日清戦争の大義名分たる清韓宗属関係の廃滅がかくして明文化されたのである。

朝鮮は、明治四十三年の「韓国併合に関する条約」により最終的には日本の領土となるのだが、日清戦争の頃の日本には併合への意図はなかつた。協約にもとづいて韓国に設置された日本の統治機構が韓国統監府であり、初代統監は伊藤博文であつた。この伊藤さえ併合直前まで、

「日本は敢て韓国を併合せんとするものではない。併呑は日本に取りて寧ろ迷惑である。日本は既に確実に韓国を保護している、何で苦しんで併呑を為さんや」と論じていた。福澤も同様であつた。氏は明治

二十七年七月の『時事新報』に「土地は併呑す可らず国事は改革す可し」と題して、「朝鮮の国土は之を併呑して事実には益なく、却て東洋全体の安寧を害するの恐あるが故に、故さらに会釈して之を取

らざるのみ」と書いている。

福澤はこの戦争を文明と野蛮との戦い(文野の戦い)だとみていた。『時事新報』明治二十七年七月の論説「日清の戦争は文野の戦争なり」においてはこう語られている。

「戦争の事実は日清兩國の間に起こりたりと雖も、其根源を尋ねれば文明開化の進歩を謀るものと其進歩を妨げんとするものとの戦にして決して兩國間の争に非ず」

日清講和条約により清韓宗属関係は切断され、朝鮮は自主独立の国となった。しかし、当の朝鮮には自身が自立国家になったという認識はなかった。日清戦争最大の戦利品として日本に割譲されたものが遼東半島であったが、条約締結の直後にロシア、フランス、ドイツの三国干渉により、この半島を清国に還付せざるを得なくなった。朝鮮はこの事実をみて「日本、待むに足らず」とみなし、今度は日本を屈服させた強国ロシアに接近して、これに「事大」するとういうふうには事は進んだ。日本は文明と野蛮の戦争に勝利したはずなのに、結局

のところは、朝鮮を文明化することかなわず、ロシアというもう一つの野蛮に朝鮮を追いやってしまったのである。

「斯る国人に対して如何なる約束を結ぶも、背信違約は彼等の持前にして毫も意に介することなし。既に従来の国交際上にも屢ば実験したる所なれば、朝鮮人を相手の約束ならば最初より無効のものど覚悟して、事実上に自から実を収むるの外なきのみ」

この文章は、『時事新報』明治三十年十月の論説「事実を見る可し」にてでてくる。福澤の没年は明治三十四年、最晩年に近いこの時期にいたって、あれほどまでに繁く論じてきた朝鮮問題をこういう形で閉じざるを得なかったことは、いかにも無念であったにちがいない。現代の韓国をみている私(筆者)にも福澤の無念がわかる。

わたなべとしお

一九三九年、山梨県生まれ。慶應義塾大学卒業。同大学院博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長を歴任。八五年、成長のアジア 停滞のアジアで吉野作造賞受賞。八七年、開発経済学で大平正芳記念賞受賞。九〇年、西太平洋の時代でアジア・太平洋賞大賞受賞。九六年、神経症の時代で関高健賞受賞。二〇一二年、正論大賞。